
Skill Force Fantasy

八草 頼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S k i l l F o r c e F a n t a s y

【Nコード】

N 7 4 9 7 X

【作者名】

八草 頼

【あらすじ】

重度のネットゲーマー、斗光新トウシュウは、ある日ログインするとゲームのような全くの別世界へ転送される。どこか見覚えのある場所だと思っていると、ここは自分が妄想で設定を考えた、スキルの力が行動を支配するスキルフォースファンタジーの世界だった。ここでは同じように原因不明の力で飛ばされた数千人ものプレイヤーたちがすでに攻略を開始していた。自らが考えたゲームバランスを崩壊しかねない凶悪なスキルが猛威を振るう中、斗光新はゲームの創造主たる自分にしか知りえない攻略法でそれに対抗する。

プロローグ

なすすべもないまま驚きに硬直した体を、無慈悲な一撃が貫いた。

人体を刺し貫く音が暗い森に響き渡る。それは全身が総毛立つようなおぞましき。

殺戮者は標的を喰らった後、禍々しいオーラを纏う剣を手元に引き抜く。

すると対象の人型シルエットは赤のエフェクトとともに消失し、ガラスの破片のようなものが飛散した。

狂気の刃がまた一つ、命を散らしたのだ。

「……………う、うわあああつ！」

一瞬間をおいての絶叫。それは何が起きたか、脳が理解するまでのタイムラグ。そして同時にこれから何が起こるのかも理解する。

仲間の死を目の当たりにしたプレイヤーたちは、死を覚悟するとともに自分たちの不運を呪った。

視界の悪い森の中、剣を手にした二人の男性とヒーラー系の衣装を身に纏った女性が悪魔の剣と対峙していた。

脱初級レベルの四人パーティーがとある森に稼ぎのため入ったところ、どこからともなく現れた黒の騎士。

その正体は人喰いと通称されるA級の賞金首であり、その由縁はバランスブレイカーと呼ばれる武器の一つ、マンイーターを所持する事にある。

人間に対して絶対的優位なスキルを持つマンイーターは、これま

でも数多の人命を奪ってきた。世界に一つしか存在しない、強力な特殊ユニークスキルを持つレアアイテム。

人喰いの振りかざすマンイーターの刀身は皮膚をはがしたむき出しの肉のような外見をしていて、まるで生きているかのように常に蠢いていた。

人の血を吸ったような不気味な赤は見るものを萎縮させ、恐怖と絶望を与える。

人喰いは体を黒の全身鎧で包んでおり、顔面はフルフェイスの兜に隠されその表情をうかがい知る事はできない。

一言も発することなく淡々と肉を食らったのち、さらなる獲物を狩るべくスキル『捕食領域』を発動させている。

『捕食領域』は、範囲内の人間のHP、SPを吸収し続けるというマンイーター装備時のみ使用可能なユニークスキルである。

すでにパーティーそれぞれの世界の端に見えるHPバーとSPバーは徐々に減少を始めていた。

そしてさらに術者より一定レベル以下の人間をバインド状態にする効果も備えている。

そのため今パーティー内で一回りレベルの低いヒーラーは、行動不能に陥っている。人喰いがスキルを解除しない限り、彼女が解放される事はない。

人喰いの名こそ広く知れ渡っているものの、遭遇したプレイヤーの生還率が非常に低いためスキルの詳細は不明なままなのである。

「逃げるぞ！」

「待って！ あたし、か、体が、動かない！」

「何だつて!？」

正体不明のステータス異常に戦慄が走る。

人喰いに出会ってしまった場合、決して戦おうとしてはいけない。

これはレベルに関係なくプレイヤー間に浸透している不文律。

逃走はこれ以上ない優れた選択だ。しかし地に縛られた仲間を置いて逃げるのがそう簡単にできようか。残されたものは確実に死ぬのだ。

だが同時に悟ってもいた。三人全員が五体満足でこの場を逃れる術がない事を。

剣を構え戦闘の意思を見せたのはパーティーのリーダーと思しき男。

彼の構えたロングソード+5は、このレベル帯にしては上等な部類に入るものだ。

戦闘は敵味方全員が行動スキルを決定する事で行われる。いわゆるターン制に近い。

リーダーは攻撃スキルを、もう一人の男は逃走を選択し、ヒーラーの女は行動不能を選ばざるを得なかった。

「はああっ！」

LV3 剣スキル、ブレイクアッパー。単体、斬撃属性。

放たれた攻撃スキルは、LVやステータスに関係なく防御スキルを使い対処しなければならぬ。これは人喰いといえど従わなければならぬゲームのルール。

対応する防御スキルを所持していない場合、確実にダメージを負う。戦闘はプレイヤーの身体能力に関係なく、スキルを選ぶだけで半ばセミオートで行われる。

相手の技名が表示され、発動までのわずかな猶予の間に所持している防御スキルを選択することになる。ほとんどのプレイヤーがオートで最も効果的なスキルを選ぶよう設定している。

人喰いはこの攻撃に対し武器攻撃回避LV1、斬撃防御LV2を

選択した。

「はああっ！」

剣が火花の散るようなエフェクトとともに黒い鎧をこすり上げる。攻撃は命中、威力は防御スキルにより四割ほど削られたが確実にダメージは通っている。

だが人喰いは全くひるむことない。攻撃ターンが移り変わる。

マンイーターから放たれたのはLV66剣スキル、人喰い（マンイート）。単体、対人即死攻撃。

ターゲットにされたリーダーの男は、対応する防御スキルを持っていない。厳密には持っていないわけではないが、スキルレベルに差がありすぎてないに等しいのだ。

マンイートは人間に対し防御力無視の即死ダメージを与える。ダメージを軽減するスキルを選んでも意味がない。

つまり対処は回避スキルの質に委ねられる。

たとえばLV1の剣攻撃に対して剣攻撃パライLV1を発動した場合、回避の確率は三十パーセント程度。

敏捷性などのパラメータによって回避率が算出された後適用されるため、最低限これらの数値は保障される。

受け手は唯一の所持する回避スキル、武器攻撃回避LV1を選択した。計算された回避率は一パーセント以下。これはほぼ、

ズシャッ！

死を意味する。

さらに一人がキラキラと輝く塵となって消えた。その間一人が逃走に成功し、残されたのはヒーラー一人。

恐怖で声も出なくなったヒーラーは、『捕食領域』によってすでに三分の一のHPを削られていた。
ターンが移行する。

行動不能

マニート

計三つの命を刈り取った人喰いは、なおも一言も発することなく
暗い森の奥へと消えていった。

プロローグ（後書き）

改稿とか頻繁にやるかもしれませんが大目に見てください。

第一話

俺は今、人喰い討伐クエストを行うためギルドに来ている。

討伐隊が結成されるのはこれで何回目だろうか。そろそろ片手では数えられない回数になるに違いない。

これまでにその全てが全滅、もしくは目的を遂げず解散の憂き目に会ったのは説明するまでもないだろう。

人喰い討伐の依頼はギルドで常時出されている状態であるが、めつきり依頼を受ける人数が減るとともに受注条件が徐々に緩和されてきている。

ついに俺のような目立つた実績のない低レベルのソロプレイヤーでさえも、討伐隊参加の条件をクリアすることができた。

人喰いにかげられた懸賞金は、今回の討伐隊の人数で山分けしても満足なほどつりあがっている。

その上人喰いを討伐したとあれば、自分の名にもより一層ハクがつくというもの。

実際Aクラス以上の賞金首を仕留めるとステータスに称号が追加され、様々な恩恵を受けられる。ヤツの溜め込んでいる経験値も相当な数値のはずだ。

ギルドに集合した討伐隊の人数は俺を含めて六人。

果たして純粹にヤツの凶行を止めようと思っている正義感溢れるプレイヤーがこの中に何人いるか。少なくとも俺はその一人には含まれない。

「へっ、まさかてめえと一緒にとはな!」

俺の顔を見るなり、鋭い目つきをした痩せ型の男が露骨に悪態をつく。

こいつの名はジャミル。レベル37の槍士^{ランサー}。

レベルもギルドランクも俺より上。年齢も二つ三つ上だろう。ソロで活動する事の多い俺を何かと目の敵にしている。

特に恨まれる行動をとった覚えはないが、どうにも俺の態度が気に食わないらしい。

「一匹狼もついに仲間が恋しくなつたつてかあ？」

「べつにお前と協力する気はない。人喰い討伐はソロじゃ受けられないだろ？」

「……はっ、言うておくがためえ、オレらの邪魔だけはすんなよ？」

カンチガイの低レベル野郎」

「俺は単に人喰い討伐のクエストに参加の登録をしたただけだ。仲間探しをするなら他を当たるさ」

「ちっ、口の減らねえ……」

この依頼は、同じように参加の意志を表明するプレイヤーが五人以上集まった時点でクエストが実行可能になる。参加限度人数は六人。

一番最初に登録したのは俺で、しばらくの間後の参加者を待つている所にジャミル達がやってきたのだ。

そのため否応なく擬似的にパーティを組む事になる。

クエストで予想以上に息があつて常時つるむように、なんてこともよくある。もちろん俺はそんなつもりは毛頭ないが。

レベル18以上、最高所持攻撃スキルレベル5以上、ギルドランクD以上、というのが今の参加条件。

この少しずつ緩くなっているこの条件設定にはなんの意味がある

のか。これが最低でも人喰いに一矢報いることができる最低ラインというわけだろうか。

……そんなわけではない。俺は知っている。レベル18ではきつと奴の『捕食領域』の餌食になるだけだ。

おそらく現在この事実を知りえるのは人喰い本人と、このスキルの考案者たる俺のみ。

俺から言わせてみれば、ジャミル程度が人喰いに挑もうなどと無謀の極みとしか言いようがない。

当然人喰いのスキルの正体も知らないだろうし、何か策があるとは到底思えない。

おそらくトントン拍子にクエストがうまくいきパーティーも強化してきたところで、調子づいているといったところか。

メンバーは俺とジャミル率いるパーティー四人、そしてもう一人は俺と同じソロプレイヤーだという。

「ジャミル、僕たちはこれからあの人喰いと一戦交えようというんだ、仲互いをするのはよそう」

穏やかな口調でジャミルをなだめたのは、セインと名乗る長い金髪を垂らした美丈夫だ。

透き通るような碧眼が印象的で、すらりとした体格に180近い上背。年は俺より五つぐらい上だろうか。

端正な顔立ちは一リアルでもさぞや女子からもてはやされたことだろう。

「ああん？ …… ああ、そりゃあんたにや期待してるぜ。レベル5の聖戦士様パラディンよう。あんたが手伝ってくれるっていうからこのクエスト受けたようなもんだからな。上級職でLVだっつてオレよかずつと上。実力は申し分ねえ。そのレベル20やそこらのカスとは大

「違いだ」

ジャミルは俺のほうへあごをしゃくって言う。

……なるほど、そういうことか。

セインはそれを制すように、

「コウト君はほとんどソロで活動してるんだろう？ それだけでもすごいことだよ」

俺の名を呼びこちらに微笑みかける。

親しみを込めた口調だが、すぐに信頼する気にはなれない。だいたいソロプレイヤーだからといって褒められるいわれもない。

ソロプレイでも極端に不利がないように「作った」はずなのだから。

もつとも、誰からも信用の薄い俺が言うのも滑稽な話ではある。

「……あんたはなんでこんなクエストに？」

ぶつきらぼうに尋ねる。……今回の討伐隊、ジャミルたちはむしろおまけで元はこいつの差し金だろう。

なぜソロプレイの人間がわざわざ徒党を組んでまで人喰いにこだわるのか。

もつともそれは俺自身にも当てはまるわけではあるが。

「……僕は、かつて人喰いにやられたパーティの生き残りだ」

セインの顔にかげりが差す。俺はいきなりの告白に少し驚く。ジヤミルも知らなかったようで、無言のまま視線をセインに向けた。

「人喰いに襲われたあの時、僕は逃げる事しかできなかった。自分

よりレベルの低い仲間を置いて」

人喰いに襲われた生き残りは少なからずいる。

だがその恐怖を目の当たりにして、ダンジョンはおろか安全な街からも出ることすらできなくなってしまった者がほとんどだ。

再び戦いを挑もうなどというプレイヤーは前代未聞だった。

セインが人喰いの生き残りだという事実よりも、その彼の意志が俺たちの驚きを一段と強めた。

ジャミルがすかさず質問を浴びせる。

「てえことはあんた……、見たのか？ 人喰いのスキルを」

「……ああ。だが詳しいことはわからない。逃げるので精一杯だった」

生存者は口を揃えてこう言う。そもそも生き残ったのは真つ先に逃亡を選択したプレイヤーのみ。

対人即死攻撃を受けたものは残らず死亡するからだ。

第二話

「仲間を置いて逃げるような人間にパーティを組む資格はない。あれ以来僕は、ソロプレイに徹した。血のにじむ思いでLVを上げ必死に強くなったんだ」

「……なるほどな、あんたにとつちや今回のクエストは待ちに待った弔い合戦ってわけか」

「今の僕ならきつと……、いや絶対に奴を仕留めてみせる！」

セインの青い瞳は闘志に燃え、その輝きを増した。彼の揺るぎない意志を体現するかのよう。

「気に入ったぜ。実は優等生ぶつたどこかイケすかねえやつだと思ってたが、どうやらあんたは本物みてえだ。クエストがうまくいったら、正式にオレのパーティに入らねえか？　そこまで自分を責めることあねえよ。ま、リーダーはオレだが。くっく」

ジャミルはそんなセインに心を動かされたのか、口の端をつり上げながらポン、と軽くセインの肩を叩く。

冷徹な男だと思っていたが割と情に厚い性格なのかもしれない。冷たいのは俺への態度だけか。

「……セイン。いくらあんたが高レベルだといつてもそれだけで人喰いが倒せると思ってるのなら、それは間違いだ」

俺は二人に水を浴びせるように口を開く。

セインがウソをついているとまでは言わないが、人喰いに復讐を遂げるなんてにわかには信じがたい話だ。

それだけ鍛錬を繰り返してこの世界に慣れているなら、どれだけ

奴が恐ろしい相手かとつくに気づいているだろうに。

それに敵討ちなんて、義理堅い奴もいたもんだ。俺にはどうもそれが鼻につく。

セインが答えるより早くジャミルがつつかかってきた。

「なんだてめえ、今のセインの話を聞いて開口一番がそれかよ？

一番ザコのお前がしかも上から？ そいつはギャグのつもりか？」

「待てジャミル。コウト君の言うことももつともだ。だけでもちろん、僕にだって勝算はあるよ」

「ならその勝算とやらを詳しく聞かせてくれないか」

「ふふつ、そうあせらなくてくれよ。とっておきの秘策なんだ。それよりもまず、お互いの所持スキルを確認する事の方が先決じゃないかな？」

セインの言うとおりスキルの確認は重要だ。最優先事項といっても過言ではない。

仮にもパーティを組む身で、お互いがなんのスキルを持っているかを全く知らないというのはあってはならないことだ。

「確かにそうだが、俺は所持スキルを一切公開するつもりはない」
「あんだと!？」

再び声を荒げるジャミル。しかしここは一步も譲る気はない。

この世界で何のスキルを持っているか知られるということは、自分の手持ちの札を全て晒すようなもの。

何ができて、何ができないのか。何が得意で、何が弱点なのか。どんな装備を持っているかなどもおおよそ見当がついてしまう。

一部ならまだしも、全てのスキルを惜しげもなく公開するなど命を預けるに等しい行為だ。

パーティ間で平然とそれをやる輩がいるが、よほど強固な絆で結ばれているか、さもなければただのバカか。

だが正直言うとそれは無理もない。スキルの重要性しかり、このゲームのセオリー的なものが全プレイヤーに浸透しているわけではないのだ。

それにももちろん、スキル公開オープン自体が悪だと言っているのではない。パーティ内である程度のスキル公開はむしろ必須である。

お互いの特長を知っている方が有利なのは言うまでもない。そうでなければそもそもパーティを組むメリットが激減するというもの。逆にスキルを一切公開しなければ信頼も得られない。どこまで公開するか、要するにさじ加減が重要なのだ。

「俺のようなザコがなんのスキルを持っていようと関係ない。……だろ？」

「はあ！？ どうせたいしたスキルなんか持ってねえんだからもつたいがらずに公開しろや！」

ジャミルはなおも食い下がる。意外に抜け目のない男だ。

てつきり俺は挑発に乗って「あーそりゃそうだな、どうでもいいわな！」と流すかと思っただからだ。

ジャミルもスキルの重要性を十分わかっているようだ。中級以上のプレイヤーなら嫌でも感じるはず。

俺は密かにジャミルに対する評価を少し上げた。

「コウト君。クエストを申し込んだ以上、パーティを組むことになるのはわかりきっていたはずだ。気持ちはわからなくもないが、それはわがままというものだろう。何もフルオープンしろというわけではないんだ」

セインも険しい表情で俺を非難する。
さすがにスキルのこととなるとセインも笑って流す気はないよう
だ。

「セインには秘策があるんだろ？ なら俺のスキルは関係ないだろ。
そもそも俺なんかのスキルが気になってしょうがないレベルなら、
もとから討伐なんて無理だと思っけど」

「……む」

セインはひと唸りした後黙り込んだ。

これだけ憎まれ口を叩けば、さすがのセインも怒り心頭だろう。
自分から討伐隊に名乗りでておいて俺の言い草もひどいもんだ。

この先ハブられても文句は言えない。

だが彼はそれ以上俺を攻めるでもなく、

「……仕方ない。ジャミル、僕らだけでも簡単に確認するでしょう」

そう言っただけで俺を置いてジャミルとともに残るパーティ三人が待つ
席へと歩いていった。

第二話（後書き）

まだ何がなんやらわからないと思いますんで、多分次あたりで主人公のいきさつとか入れます。

第三話

俺はかつて、重度のネットゲ愛好者だった。

当時ハマっていたのがパクス・フォース・ファンタジーとよばれるファンタジー風のRPGMMO。

最初は何の気なしに始めたゲームで、ヒマつぶしに少しやってみるぐらいのつもりだったが俺はすぐにのめり込んだ。

その理由は、ゲームを始めたての俺を親切にかまってくれたヤツがいたからだ。

リアルでは気の合う友人ができなかった俺も、不思議とそいつとはウマがあった。

正直ゲームの内容よりも、そいつとチャットしているほうが楽しかったぐらいだ。

面白いことの一つも言えない俺に飽きもせず付き合ってくれた。初心者俺と付き合うメリットなんて無いに等しいはずなのに。

ジンというHNのそいつが、すでに名のあるギルドのリーダー的存在だったのを知ったのはしばらくしてから。

俺はジンの紹介でパーティを組みギルドに入り、どんどんゲーム漬けになっていった。この頃がまさに俺の絶頂期だったと思う。

だがずっと一緒にやってきたジンも、リアルが忙しくなり引退した。

引退したジンに代わってリーダーとなったのは、いけ好かない重課金プレイヤー。

残された俺はそこそこのポジションにいた事もあり、ことあるごとに反発し合うようになった。

もともとコミュニケーションが得意なほうではないし、なにより

リアルマナーに物を言わせてでかい態度を取るそいつに従うのがどうしても嫌だったのだ。

性行の不一致といつてもいい。ゲーム攻略の方針から笑いのツボまでことごとくズレていた。

何かあると自慢話しかせず、効率、ギルドの強化が口癖で、おおらかにやっていたジンとは毛並みがまるで違う。

実際ジンが抜けて少なからずメンバーの入れ替わりがあり、なじみのメンバーが抜け奴の息がかかったメンツが流入してきた。

以降、目を付けられた俺はいちいち槍玉に上げられ執拗な嫌がらせを受け、やがてギルドからもパーティからも総スカンされた。

根回しだけはうまいやつで、俺が気づいた頃には周囲に味方がほとんどいなかったのだ。

俺にも全く非がなかったわけではない。協調性に欠けるといのは前から言われていた事だし、自分でも自覚していた。

それでも自分を大きく曲げてまで媚びるような態度を取るのとは何か違うと思った。

そもそもそれが嫌でリアルの付き合いをほとんど放棄しネットに没入するようになったぐらいだ。

ガキだと言われても仕方ない。開き直りじゃなく俺は実際ガキだし、変に大人ぶる気もない。

俺は冷静沈着で感情の起伏も少なく、何を考えているかわからない人間だと評される事が多い。

だが実のところ短絡的な思考回路の持ち主で、行動理念はいたってシンプル。その上極度の負けず嫌い。

胸のうちに渦巻く激情を無意識のポーカーフェイスでごまかすこともしばしば。

パーティと袂を分かつ際も「じゃあ俺はもういい」と一言言い残すだけだったが、内心はらわたが煮えくり返る思いだった。

その怒りは毎日欠かさずログインしていたゲームの世界からしばらくの間距離を置くようになるほどだった。

もちろん相手が憎いという感情もあるが、それよりも過去にありたりアルでの似たような出来事を思い出ししてしまい、自分自身に苛つくとともに自己嫌悪に陥っていた。

ある程度踏ん切りがつくまで一ヶ月程費やした後、俺はソロプレイヤーとなって活動を再開した。

最初のうちはゲームを初めてすぐの頃を思い出すような感覚でそれなりに新鮮だったが、当然ソロプレイには限界がある。

特に俺のやっていたパクス・フォース・ファンタジーはソロプレイヤーをナメているとしか思えない仕様で、一人だと参加すらできないクエストが目白押し、当然それに付随するアイテムは入手不可。強力なパーティ補正にパーティボナス。

すでに結構な高レベルに達していたので、パーティ前提のレベル帯のモンスターにソロでかなうはずもなく限界はすぐにやってきた。

それに一人でやるゲームはどこか味気なかった。これならおとなしくオフゲーをやっていたほうがマシかもしれない、そんな事を思った。

そしてその頃になって気づいた、俺がネットゲームに求めているもの。それは……。

負けず嫌いの俺もさすがに三ヶ月もたたず引退した。

最後は驚くほどあっけなかったが、それでもかなり持った方だと思っ。時間を浪費したとも言えるが。

その後も俺のわけのわからないプライドが邪魔したのか、他のゲ

ームに手を出そうという考えには至らなかつた。

一気にリアルに引き戻されると、現実の友人関係も希薄だった俺は鬱屈とした日々を過ごす。

自分の生きがいをむしりとられた気分だった。心に穴が開いたという表現がまさにしっくりくる。

しかし気づけば俺は、ヒマさえあれば妄想全開のMMORPGの設定を考えるようになっていた。

そしてそれをネットのホームページにアップするという行為。今となれば暴挙としか思えないが、を行った。

ゲームの名前はスキル・フォース・ファンタジー。

中身こそ全くの別物だが、ネーミングは無意識にパクス・フォース・ファンタジーからパクっていた。

当初パクス・フォース・ファンタジーなどというクソゲーをはるかに超えるようなゲームを考えてやる、と半ば逆恨みのような感情で始めたのだが、ゲームに費やしていた時間がぼっかり開いた分それまでの情熱が乗り移ったかのように熱中した。

それどころか学校にいる時も授業そっちのけでノートに思いつきを書き殴り、帰宅後PCにそれを打ち込みすぐさまページを更新、という事を繰り返した。

それは読む人の事を考えないほとんど病的なまでの文字の羅列。

多少の誤字脱字は気にすることなくひたすら妄想を綴った完全な自己満足。

数年後完全なる黒歴史と化すことは間違いなかった。

それならノートの隅っこで十分だろと言われそうだが、それでもネット上にアップし続けたのは誰かが俺の設定を読んでくれていて更新を待っているかも、という淡い期待が心のどこかにあったせい

かもしれない。

アクセスは全くといっていいほどなかったが、ゼロではなかったのだ。

まあ何かの攻略サイトと間違えて迷い込んでいる可能性は否定できない、いや実のところそれがほとんどだろうが。

狂ったように続けた作業も、一段落つくときが来た。

俺はありもしないゲームの設定からさらに攻略法を考えたりして妄想を続けた。そのための裏設定なんかも随時作った。

今思うと相当病んでいたのだと思う。結局のところ、そんな事をしても俺の心に開いた穴が満たされる事はなかった。

またしばらくたったある日の自室。

スキルフォーアフアンタジーの妄想にもすっかり醒めた俺は、ずさんだ意識の中ネトゲを始めた頃の懐かしい記憶を思い出していた。右も左もわからない俺を、冗談を交えながらレクチャーしてくれたジンのことが頭に浮かぶ。

どうしても忘れられなかった。リアルで仲間はずれにされへこんでいた俺を、受け入れてくれたあいつ。

ろくに会話もできずおたおたする俺に「俺がいろいろ教えてやっからよ、パーティ組もうぜ！」そう言ってくれたあいつ。

ジンにとって俺は大勢いる仲間のうちの一人に過ぎなかったのだろうけど、それでも俺はうれしかった。

救われた気持ちになったんだ。

そうだ、もう一度最初からやり直そう。新しいアカウントを作って、名前も容姿も全部変えてレベル1から。

そう考えた俺は、禁断のパクス・フォース・ファンタジーに再びログインすることを決意した。

そんなことをしたって、すでに研究し尽くしたゲームの記憶はまだ頭の中にあるというのに。

もうジンはゲームの中にはいないというのに。

だが決断した後の俺の行動は早かった。すぐさま登録を済ませ、あっという間にログイン前へ。

「……そうだ、最初からこうすればよかったんだ。くだらねえゲームの妄想なんかしてないでさ……」

我ながら無駄な時間を費やしたもんだ、と自嘲気味につぶやく。だがログインボタンをクリックした次の瞬間。

俺の妄想は現実になった。

第四話

俺がこのスキルフォーアフアンタジーの世界にやってきてからおよそ一年半が過ぎようとしている。

この摩訶不思議な世界は、それまで俺のいた現実世界での正常な感覚をすっかり奪っていった。

VRMMO ライトノベルやネット小説によく登場するこの単語。

もしそんなものが実在したなら、俺のおかれた現状を説明するのがどんなに楽だろうか。

俺は今まさにそのVRMMOの世界に溶け込んでいる、と言ってしまえばそれでたいていは事足りるのだから。

だが厳密には違う。VRMMOの細かい定義なんてのは知った事ではないし、ここで議論する気もない。

しかしどうだろう、このバーチャルとは思えないほど色彩豊かな、生命力に満ち溢れた美しい世界は。

俺には、これがもう一つの現実としか思えない。広い宇宙の片隅には、こんな世界があるのかもしれないとまで錯覚する。

そうとも、ここで暮らす限りなく人間に近いNPCにとってはこれが現実なのだ。

彼らもまた、NPCとは思えないほど多種多様な行動をとる。

いや、多種多様どころか無限に近い。俺なんかよりずっと感情豊かで、人間味がある。

そもそもNPCという呼称に語弊があるのだ。彼らはここで生を受け子をなし死んでいく。

プレイヤーよりもいろいろと制約は多いものの、誕生したのがたまたまゲーム的なこの世界であったに過ぎない。

そんな彼らにとって、フィールドを徘徊するモンスターや、ダンジョンを探索する冒険者、一瞬で町を行き来したりできるアイテムや、そしてなによりも行動を支配するスキルの存在、そんなものは当たり前の日常なのだ。

俺自身も視界の隅に現れるHPバーやSPバー、アイテムや装備品を一瞬で具現化したり収納できるアイテムボックス、それを呼び出す透過モニターにすっかり違和感なくなじんでいた。

それはきつと、俺よりも早くこの世界に来ていたプレイヤーたちも同じだろう。

今ここにはもともとからこの世界に住んでいたNPCと、そして俺と同じくここにやってきたプレイヤーの二種類の人間がいる。

プレイヤー達には、とあるネットゲームにログインした瞬間ここに飛ばされたという共通理解がある。

この不思議な現象に巻き込まれたのは俺一人ではなかったのだ。

俺が初めてこの地に降り立った時。その時のことは今も鮮明に覚えてる。

「はい、二千とんで五十一人目のプレイヤーの方とうちゃく！」

網膜が光を感じる前に、底抜けに明るい声が耳に飛び込んできた。気づけば俺は自室のモニター前から、一転して視界の開けた場所に立っていた。

「はい、お名前は？」

辺りを見回すと中世風の建物が軒を並べている。

今俺が立っている周辺はちょうど広場のようになっていようだ。上空は抜けるような青空。吸い込む空気にどこか異質な匂いを感じる。

日本から一度も出たことのない俺は、異国の空というのはこんな感じなんだろうかと思いを馳せる。

そう、まるでファンタジーRPGの世界にでもやってきたかのような。

「ちょっとお、無視しないでよお！」

すぐ近くでキンキンと金切り声がする。

ぐるぐると周囲を見渡していた俺は、その声に少し不快感を覚えつつまっすぐ前に視線を戻した。

活発そうな瞳をした、同い年ぐらいの女の子と目が合った。

「あ、やっとこっち向いた。じゃ、気を取り直してレクチュアー始めよっか。はい、まずは落ち着いて、深呼吸。はい吸って〜」

少女はそう言ってすう〜とやりだした。俺はとりあえず無視し、少女の観察を始めた。

栗毛のショートヘアに、健康的な肌。やや幼さの残る顔はコロコロと表情を変え、活気に満ちている。

彼女はゲームでしか見たことないような冒険者風の服に身を包み、腰元に短剣らしきものをぶら下げていた。

やはりどうしてもそこに目がいつてしまう。

まずそのいでたちからして、普通じゃない。コスプレだとしても完成度が高すぎる。

しかしよく見れば背後を歩きかう人々も似たような格好をしていた。

それどころかキラキラ光るごつい鎧兜を身に着けているものもある。

そういえば俺は………………。と視線を自分の体に落とした。

「げっ、なんだこりゃ」

驚いて声が出てしまう。

俺も彼女と同じような姿をしていたのだ。ついさっきまでTシャツにジーパンという格好だったはずなのに。

「げっ、てなにさ、開口一番がそれかい！」

すぐに突っ込まれた。驚いている俺を見てどこか楽しそうだ。

馴れ馴れしいのは苦手なのだが、彼女からは不思議と嫌な感じはしなかった。

「これはいったいどういう……………」

「はいっ！ それはわたくしフィーネちゃんがいまから説明します！ あなたは今からこのハイゼルラントの住人です。冒険者となつてギルドの仕事をこなすもよし、商人として財を生すもよし、はたまた一般市民として家族を作り平和に暮らすというのも……………」

「ちよつと待った」

「はい？」

「…………今、ハイゼルラントって言ったか？」

「え？ ええそりゃあここはハイゼルラントですぜ？」

ハイゼルラント。それは俺が考えたスキルフォースファンタジーの世界の呼称。

偶然にもここはそれと同じ名前の世界らしい。

まあ、よくある名前……………か？

「いったいどうなってんだ……？俺はついさっきゲームにログインしようとして……」

「あー、はいはい。それね。外から来た人みんな言うんだけど、ぱくすふおーすふあんたじー？っていうのを始めようとするとここにワープするみたい。一年近く前かな、何百人かわーっとやってきて、それ以来ちよびちよび君みたいのがやってくるようになったの。おわかり？」

「はっ、ゲームの中に飛び込んだってか？んな馬鹿な」

「みんなゲームゲーム言うけど、失礼しちゃうよ。君達がどんな世界から来たのか知らないけど、わたし達はここで真面目に生きてるんだよ？モンスターに襲われてHPがゼロになったら死んじゃうし、生き返ったとしてもレベルが下がったりするし」

「思いつきりゲームじゃねえか！」

思わず突っ込んでしまった。

初対面の人間に、俺らしからぬ態度だ。それもこの少女の持つ親しみやすい雰囲気のせいだろうか。

「なあに？そんな怒鳴って。じゃ早速システムウインドウを開いてステータスと、スキルを確認してみよっか」

何だよそれどうやって開くんだよ……、システムウインドウ？

心の中でそう文句を言うと、いきなり眼前に半透明のモニターが出現した。

「おわっ！」

突然現れた青色のインターフェイスに驚いた俺は尻餅をつきそうになる。

その上いつの間にか視界の端に青と緑のゲージらしきものも表示されていた。

そんな俺を見てフィーネという少女はうれしそうにニヤニヤしている。まったく、何が楽しいんだか。

「ねえねえ、その右下の、オープンっての触ってみて。そう、軽くタッチするの」

フィーネは俺と顔を突き合わせるようにして、同じように自分の前にウインドウを開いていた。

俺はわけもわからず言われたとおりに画面を指でタッチする。

「……おっ、きたきた。どれどれー、ふーん、コウト君っていうんだ。ステータスは……、筋力18 体力17 敏捷20……んでH PSPが……まあ普通だね。じゃ肝心のスキルはつと……」

「おい待て、お前何を勝手に……」

「これを見るのが楽しみなんだよねー、オリジンスキル。えーつと、

………
『^{オラクル}神託』？ なにこれ？」

オリジンスキル。その単語を聞いて俺の疑念がさらに強くなった。それはスキルフォースファンタジーで設定した、誰もがレベル一の時点ですでに持つユニークスキル。

入力したパーソナルデータの内容を参考に一つだけ選出され、その効果もきわめて独特なものが多い。

体よく言い換えるなら才能のようなものだ。

中にはゲーム中いかなる手段を持ってしても会得できないものも含まれる。

オリジンスキルは基本一人一つだが、レベルが上がることでさらに増える場合もある。

しかしなぜそんな単語が……。まあよくある名称……。……。かもしれない。

「長い事この仕事やってるけど、見たことも聞いたこともないスキルだねえ……。ねえ、ちょっと使ってみて」

「使ってみて……。どうやって」

「なんかアクションスキルみたいだしさ、スキル発動の仕方はいろいろあるけど、今回はとりあえずそのウィンドウの文字に触ってみて」

すでになんとなく嫌な予感がしていた。

それでもこうしないと、先に進めない気がして彼女の言う事に従うことにした。

俺はゆっくりとウィンドウをタッチする。

そして、俺のこれまでの疑念は一発で確信に変わった。

第五話

「うわっ！」

俺は驚愕のあまり情けない声を出してしまう。

スキルを発動した瞬間、ウィンドウ全面に映し出されたのは、どこかで見覚えのある文字の羅列。

それは、俺がネットにアップしていたスキルフォースファンタジ―の設定だった。

「なにになにどしたの？」

「や、やめろ見るな！」

画面を横から覗き込んでくるフィーネを慌てて押しつける。

コイツは俺の中で早くも黒歴史となりかけている。あの時の俺はどうかしていた。

こんなものを見られたら赤っ恥間違いなしだ。

「ちょっとなにすん……うわ、なにこれ誰かからのメッセ？ なんかヤバくない？ このスクロールバーの感じからすると、ものっすごい分量みたいだけど」

「いやあ困ったなあ誰のイタズラだろうなあ！」

無理くり体を寄せてくるフィーネに辟易しながら、俺は急いでウィンドウ自体を消去した。

すぐさま横でフィーネが口を尖らせる。

「ちょっとなんで消すの！ まだ全然見てないのに。……大体おかしいよ、ついさっき来た人にあんな膨大な文書が送られてくるなん

て。ん？ ……………もしかして今のが神託ってこと？ 神のお告げ？」

「違う。今のはただの官能小説だ。感動巨編だぞ」

フィーネはジトツとした視線を送ってくる。

今の俺にとつてはそのぐらい、いや下手するとそれ以上に恥ずかしいものである事には変わりはない。

「まあいいや。えっと……………ナンバー2051コウト。オリジンスキル『神託』、詳細は不明。人物スキルともかなり怪しいつと。あとエロ小説が大好き」

フィーネは宙に浮かぶホログラムキーボードを使い、軽快に文字を打ち込み出した。

「おいこら、何やってる」

「なにつて、もう一つのお仕事。プレイヤーの情報、高く買ってくれる人がいるんだよね」

「なんだつて？ ……くそ。大体お前なんなんだ？ いきなり絡んできやがって」

「なんだとはなにさ。これはれっきとしたギルドのお仕事だよ。やってきたプレイヤーにチュートリアルを行い世界観を説明するっていつ」

「なら職務怠慢だ。職権乱用でいかかわしい事をしてるとギルドに密告してやる」

「それではスキルの詳細な説明に移ります」

「変わり身早いなおい」

俺の考えた設定そのものが神託。

ということやはりここはスキルフォースファンタジーの世界…

…？　そして俺は神か…？　そんな馬鹿な。

そう決め付けるのは早計かもしれないが、少し落ち着いてみるとウィンドウのインターフェイスも、H P S P バーもどこか見覚えがあった。

その辺のデザインなんかはパクス・フォース・ファンタジーから丸パクリしたものだからだ。

それにさっきの情報オープンフルオープンのシステムだって……。

よく考えたらいきなり全情報公開なんて迂闊な事をしたと後悔する。

さつきすでに半ば疑ってはいたが、それでもここがスキルフォースファンタジーの世界だなんて信じ切れなかったのだ。

だが引つかかる点もある。俺は『神託』なんていうスキルを設定した覚えはない。

忌々しいが意外とこういう記憶は頭に残るもので、すっかり忘れていたという可能性は低い。

おそらくもう一度神託スキルを使って確認したところでテキストのどこにも見つからないだろう。

第一プレイヤーに設定テキストを表示させるなんていうおかしなスキルを作るわけがない。

つまりここは百パーセント俺が考えた世界と同じ、というわけではないようだ。

それに主だったNPCの設定はしたものの、フィーネのようにモブ、といったら失礼かもしれないが、このレベルの人物一人一人の造詣まで細かく作ったわけじゃない。

だいたい俺一人でこんな高度な人物設定ができるはずもない。待てよ、こいつも俺と同じくプレイヤー？

いや、それはない。フィーネはついさっき「外から来た人」と発言した。彼女は这个世界に「最初からいた」のだ。

「しかしすごいな……。NPCっていうかもう違いがわからないじゃないか……」

「うん？ 言っとくけどね、プレイヤーの人たちがよくそう呼ぶけどそのNPCってのはもはや蔑称だよ。あたしはそんな気にしないけど、差別だっと思って思う人もいるからあんまり使わない方がいいよ」

「お前だっつてプレイヤープレイヤーって言うてるじゃないか」

「その呼び方をべつに嫌がる人はいないし、あたしが言い出したわけじゃないし」

おそらくここにやってきた奴らがゲーム感覚で自分達の事をプレイヤー、そのほかをNPCと呼んで区別しただしたのだろう。

まあいきなりNPCなんて言われりゃカチンとくるのも無理はない。

俺は2051人目のプレイヤーらしいが、この数字が意味するものは……。

「えーつとそれで、スキルなんだけどね」

「もういい。大体わかった。じゃあな」

ここがスキルフォースファンタジーなら俺にチュートリアルなんて必要ない。

そんなことより早いとこ俺の設定とこの世界にどれだけの齟齬があるのか自分の目で確かめた方がいい。

俺はフィーネの横を通り過ぎて街の奥へと歩き出す。

しかしすぐに後ろから腕を掴まれてしまった。

「ち、ちよつと待ってよ！ これじゃ本当に職務怠慢になっちゃうじゃん。怒られちゃうよ」

「いや、いいよ、お前はちゃんと仕事をした。もう十分だ、ありが

とう」

「……そ、そう？ あ、あのさーあたし今日これで仕事終わりなんだけどよかつたらご飯でも……」

「仕事？ お前はずーっとここでやってくるやつと機械的に延々同じ絡みをするんじゃないのか？」

「そんなわけないでしょ！ ……なーんかバカにしてる？ こんな仕事いつだってバツクれることだってできるんだよ。……報酬はもらえなくなって評価も下がるけど」

「じゃあ好きにしろ。もう俺に付きまとう必要ないだろ」

「いやホラ。コウトくん性格はアレだけど見た目はまあまあ好みかなー……、なんてね」

見た目？ そういえば……、眼鏡もしていないのに遠くまでよく見える。

俺はウインドウのステータス画面を開き、全身像を表示して顔をクローズさせる。

システムウインドウはパクス・フォース・ファンタジーのものに似ていて、そのぐらいの操作は戸惑うことなくできた。

そこに写っていたのは、紛れもなく俺の顔だった。全くの別人になっただけでなくて安堵する。

しかし髪型は普段しないような長めの黒髪だし、そのせいもあってか全体的な印象がつかさつき無駄にイケメンに設定したアバターに似ていなくもない。

顔に何箇所かあった吹き出物の跡も消えており、肌が綺麗になっていた。多分に上方修正したのは間違いない。

身長や体重はほぼ変わらない数値を示していて、誤差の範囲内だ。自分が自分である事を確認した俺は、急激に押し寄せてきた現実感に耐え切れなくなったように今更ながらの疑問を口にする。

「俺は……プレイヤーたちはもう、戻れないのか？」

「……そういう話は聞いたことないよ。死んじゃって消滅する事はあるけど……、そしたら元の世界に帰還ってなるのかは……わかんない」

「そうか……」

ある程度予期していた答えに、俺は反発するでもなく嘆くでもなくただ声を洩らす。

ここでわめき散らしても仕方ない。そんな妙に達観した気分だった。

いや違う。そうやって他人事のようにスカしていることで、どうにか気を紛らわせようとしていたのかもしれない。

この世界で生き抜く覚悟。このときの俺に、そんなものがあるはずもなかったのだ。

第五話（後書き）

次回は再び人喰い討伐へ戻ります。

第六話（前書き）

時系列は二話の後になります。

第六話

ジャミルのパーティに俺とセインを加えた討伐隊の一行は、プレイヤーが最初に飛ばされてきた街「ドーンゲート」を出発し夕闇の森、別名人喰いの森へやってきていた。

夕闇の森自体はなんてことはない、薄暗いだけの変哲のない森だ。強力なモンスターが出現するわけでもない。

街からもそう遠くないことから初級レベルのプレイヤーにとって格好の稼ぎ場になっていた。

だがある時期を境に、この森に稼ぎにやってくるプレイヤーはほぼいなくなった。

それが発覚したのは四人のパーティを組んで森に向かったはずの男が、ただ一人血相を変えてドーンゲートのギルドに駆け込んできたときのこと。

男の顔面は蒼白、全身は恐怖に震えしばらくまともに話もできなかったという。

「仲間が、食われた」

やっとの思いで口にした一言。

その場に居合わせたプレイヤーたちは半信半疑に男の話聞いていた。

聞けば禍々しい剣が次々に仲間の命を奪ったという。そのくせ周囲がやけに暗くてなにがなんだかわからなかったと、どうにも歯切れが悪い。

そんな中話を聞いていた名うてのレアモンスターハンターが興味を示し、单身森へ向かった。

その時はすぐに解決するだろう、と皆が気にも留めなかったのだ

がその三日後、ギルドによって森への立ち入り禁止が呼びかけられた。

その後、幾度となくその正体を突き止めるためギルドによって捜索および討伐隊が結成されるも、詳細が判明する事もなくいたずらに犠牲者を出していた。

あそこには、人を喰らう悪魔が住んでいる。

命からがら逃げ出した討伐隊によってそんな噂がささやかれるようになり、いつしか森は人喰いの森と呼ばれるようになった。

時刻はまだ午前十時前。

なのに森の中は日没寸前なみの薄暗さ。ここだけ違う時が流れているかのようだ。

森に足を踏み入れるなりパーティメンバーの一人、魔法使い（マジシャン）の男が口を開いた。

「……な、なあジャミル。悪いんだけど俺、やっぱり今回降りるわ」

「は？ なんだよいきなり、そりゃねえだろここまできて」

「い、いやさ、やっぱりやべえよこの森。入った途端なんか……全身に悪寒がして」

「入った途端って……、何ビビってんだよ。森自体はなんでもねえ、ザコモンスターばっかの場所だぞ？ ……おまえのオリジンスキル

『危険予知レベル1』だっけか？ 『臆病風』にでも改名した方がいいんじゃないの？」

がはは、と笑いものにするジャミル。

だが『危険予知』はそれなりに有用なスキルだ。

高レベルになればトラップの有無などはもちろん、初見のモンスターでも危険度が見抜けるようになる。生存の確率がグンと上がるのだ。

「いやでもマジでさ……」

「あーもういいよ、お前一人で先戻ってる。言っとくけど今回の報酬はビター文くれてやらねえからな」

「あ、ああ。構わねえ。……じ、じゃあ後で」

そう言うなり魔法使いはきびすを返して森から脱出した。

「まったく、ああいうのがあるとパーティ全体の士気に関わるぜ。困ったもんだ。なあラウル？」

「うむ、やつは少し慎重すぎる嫌いがあるからな」

ジャミルの隣でラウルと呼ばれた戦士風の男性が同調する。

先頭に行くジャミルはさらに後ろのヒーラーの女性に振り向き、同じく同意を求めた。

彼女は小さな声で意思表示する。

「え、えと……わ、わたしもちよつと怖い……かな」

「なんだリイナ。お前も抜きたいとか言うんじゃねえだろな？」

「そ、そんなことないよ。だってわたしがいなくなったら回復役が……」

「まあ安心しろ。リーダーの俺がしっかり守ってやつからよ」

それを聞いていた最後尾のセインが薄く笑う。

「ふふつ、ジャミルは意外にしつかりリーダーなんだな」

「当たり前だろ、オレのほうがレベルも経験もこいつらより一回り

上なんだからな」

ジャミルは得意げに言う。

だが俺に言わせればマンイーターとやりあうのに回復役を連れてくること自体間違っている。

ヤツの攻撃は死ぬか、生きるかしかないのだから。回復しているヒマなどない。ムダに仲間を危険に晒すだけだ。

何か味方をサポートできる強力なスキルがあるのなら話は別だが、今の口ぶりからすると純粋な回復要員だろう。

「コウト君、何か言いたそうだね」

セインは並んで最後尾を歩く俺に小声で話しかけてきた。

「いや、べつになにも」

「そうか。……ずっと気になっていたんだけど、君はどうしてこんなクエストに？ 事前にパーティも組まず一人で参加しようとするなんてかなりのリスクだと思うんだけど」

セインはどうにも俺のことが気になるらしい。

いつ人喰いが襲ってくるかもしれないというのに、随分余裕だ。まあいい、こっちも確認したい事がある。

「俺のレベルじゃ分不相応ってことか？」

「い、いやそんな事を言うつもりはないよ、気を悪くしないでくれ。だが君のレベル……さっきジャミルに聞いたんだが、まだ二十前半らしいじゃないか。本当にそうなのかい？ もしそうなら……すごく勇気のある行動だと思ってる」

「セインほどのプレイヤーにそう言ってもらえるなんて光栄だな。まあそれぐらいが取り柄なものでね……。ほら、見てくれよ」

俺はウインドウを開き、ステータスを表示させた。他人にも視認できるように覗き込み防止をオフにする。

セインは少し驚いたあと、俺のステータスを確認した。

「レベル……23。……まさか君がステータスを見せてくれるなんて思わなかったからビックリしたよ」

「スキルを一切明かさない分、せめてこのぐらいはな」

「いや、十分だ。僕を信頼してもらえたようでうれしいよ。代わりにいつては何だけど、君にも僕の秘策を話しておこうか」

「ああ、ぜひ聞きたい」

「僕はついこの前、^{パラディン}聖戦士になったわけだけど、その時に使えるようになったジヨブ固有のあるスキルがね、マンイーターの即死攻撃に対抗しうるのに気づいたんだ。それを発見した時は、全身が震える思いだったよ」

「マンイーターの即死攻撃……。なら『捕食領域』にはどう対抗する？ あの徐々にHP、SPを吸収するっていう」

「え？ ……ああ。吸収量自体はたいした事ないからね。短気決戦に持ち込めば問題ないよ。でも安心してくれ、いざとなったら君達のことは僕が守る。もう目の前で仲間がヤツに殺されるなんてことは……。絶対にさせない」

「……………そうか。頼りに……………してる、よ……………」

俺はやりきれない気持ちでなんとか最後の言葉を口にした。

「ああ」とセインはうれしそうに顔を綻ばせる。

俺はその顔を見てさらに胸が締め付けられるような思いだった。いつものポーカーフェイスが役に立つ。

やめてくれ、もうこれ以上は。どうして俺たちは、この世界で、こんな風になってしまったんだろう。

だが折れそうになる心をなんとか押さえつけ、俺はこれから始ま

るであろう死闘への覚悟をいっそう強めた。

第六話（後書き）

次回やっつとバトルでございます。お楽しみに。

第七話

最近是人喰いの出現する頻度がめっきり減った。

もともと見境なく人を襲うようなタイプではないし、夕闇の森以外の場所でヤツの目撃情報は一切ない。単に生き残りがいないだけかもしれないが。

すでにその名はドーンゲートを中心に広く知れ渡り、この森に立ち入るものもすっかりいなくなった。

そのため今、皮肉な話であるがヤツの獲物はもっぱら人喰い討伐隊である。

実は最近になって討伐隊の参加人数に上限ができた。その数六人。過去に人喰い抹殺のため大軍を何度も送り込まれた事があったが、標的はついにぞ現れなかった。

またサーキュレーターと呼ばれる強力なプレイヤーたちのパーティが派遣されたこともあった。

その時も同じく人喰いが姿を現すことはなかった。大勢の人数や名の知れた精鋭などは明らかに警戒されているのである。

このためギルドも半ばさじを投げ出す状態で、とりあえず依頼だけが出されているという状況だ。

しかし中途半端なパーティが依頼を受けた時だけ、それを狙ったように惨劇は起こる。

俺はほぼ確信していた。今回、間違いなくヤツと戦う事になる事を。

時おり現れるザコモンスターを先頭に行くジャミルたちが軽く蹴散らしつつ、俺たちは森の奥深いところまで来ていた。

といってもそれほど大きな森ではない。ここからだって十五分も

走れば出口まで戻れる。

本当にトラップもギミックも何もない森なのだ。

「ちっ、ザコばっかで人喰いなんて全然出てこねえじゃねえか！
おいこら人喰い！ いるならさっさと出てきやがれ！」

ジャミルが苛立たしげに言う。

こいつの豪胆さには俺も少しあやかりたいくらいだ。例えそれが
無知から来るものだとしても。

「あの……ちょっと休憩しませんか？ ちょうど見通しのきく場所
に出たことだし……」

小道が終わり広場のようなところに出たところで、リイナという
ヒーラーがおずおずと提案した。その声はとても弱々しい。

「うむ、やみくもに歩き回るより少し様子を見たほうがいいのかもし
れんな」

戦士のラウルがそれに同意する。

ジャミルは少し不満そうな顔をしながら意見を求めるようにセイ
ンへ視線を向けた。

セインがうなずくのを見ると、リーダーとして器の大きさを見せ
付けたいのか「おし、じゃあしばらくこのへんで待機だ」とジャミ
ルはその提案を受け入れた。

俺には何の意見も求められなかった。というかギルドでの一件以
来ジャミルは俺を「いないもの」としている。

それは俺としても望むところだ。変に馴れ合うよりはこのほうが
ずっといい。

休憩といつてもアイテムボックスに武器を放り込んで武装まで解除するわけではなく、おのおの武器を具現化させたまま警戒は怠らない。

ジャミルは両手持ちの槍シャークスライサーにワニ革のレザー、セインは両手大剣バスターブレイドを空色の軽鎧スカイアーマーの背にしょっている。どれもそう簡単に手に入れられる品ではない。

他の二人は特筆する装備品はないので割愛するが、それは俺自身にも言える。

ドーンゲートの武具店で十把一絡げにして売られているブロードソードに、申し分程度にレベル1の防御スキルがついた皮製の盾。駆け出しのプレイヤーでもしないような装備だ。そんなところもジャミルの反感を買う一因となっているのだろう。

一息つくパーティ内に沈黙が流れる。開けた広場に聞こえてくるのは森がザワザワとささやく音。

ジャミルは落ち着きなく広場を行ったり来たり、他のメンバーは一箇所にかたまつて休憩を取っている。

やがてぼつぼつと会話を始めた三人を尻目に、俺はウィンドウを開き黙々と武具やスキルのチェックを行っていた。

そのままモンスターモンスターの襲来もないまま五分弱が経過する。当然人喰いは現れない。

休憩を取った事によりどこかピリピリしていたパーティ内がなごんできたようだ。小さな笑い声さえ聞こえてくる。

もしかするとこのまま、人食いと遭遇することなく今回のクエストは終了になるのでは とそんな雰囲気雰囲気を醸し出したその時。

それは突然訪れた。

戦士ラウルがセインに質問をした時だった。

「ときにセイン。君の秘策とやらの要となる聖戦士のスキルについて、詳細を聞きたいのだが」

ラウルは不意にそんな事を尋ねた。

確かにセインのスキルありきの戦いになるだろうし、気になるのも無理はない。

「そうだな……もういいか。ラウル、ちょっとこっちに来てくれ」

セインは手招きをしてすぐ近くまでラウルを呼び、おもむろにシテムウインドウを開いた。

その時うかつにも自分のウインドウを注視していた俺は、はつ、と二人に目をむけ叫んだ。

「セイン！ 待……」

ズシャツ！

耳を貫くえもいわれぬほどの不快音。

それは、人喰いが人を喰らった音。

命を吸われた戦士がどさりと地に崩れ落ちる。

そして彼の体は、無数のきらめく破片となって霧散した。

「な……！？」

少し離れたところからジャミルの声が漏れる。

その間俺は無心にウインドウを操作し、神業のごとき早さで装備を変更した。

そしてすかさず向けられる悪意ある瘴気。

その発信源は……………眼前で人喰いの剣を携えるセイン。

マンイーターのスキル『捕食領域』が発動された瞬間だった。

「セイン……………？ ま、まさか……………」

呆然と立ち尽くすジャミル。

セインはその姿をあざ笑うかのように不気味な笑顔を浮かべる。

「くつくつく……………。なかなかいい表情するじゃないかジャミル？
最近はこれがやみつきでねえ……………、人喰い様をぶったおそうなんて
いう馬鹿げたクエストを受けるマヌケに、身の程を思い知らせてや
るんだよ」

狂気を孕んだその声音は、もはや聖戦士セインのものではなかつた。

あまりの驚愕にジャミルは反論する事すらできない。

セインはさらに続ける。

「ただこの場合、面が割れるから皆殺しにしないとイケないのがネ
ツクかねえ……………。残念ながら」

セインはセリフとは裏腹に愉悅の表情で俺たちを交互に見回す。

俺のすぐ後方のヒーラーは一言も声を発しない。恐怖で体が硬直
しているのだろう。

それにおそらく、『捕食領域』によるバインド状態にあると思わ
れる。

「な、なんで……………こんな」

「ああ？ いや最高に愉快よ？ 低レベルのヤツを高レベルのヤツ

が見捨てて逃げるサマ。きつとオレがフォローしてやるよ、なんつってパーティ組んでんだろうなあ？ くつくつく……………あはははははは！」

下卑た声で哄笑した後、人喰いはぎよろりと俺に睨みをきかせた。

「コウト君…………。君もなかなかケツサクだったよ。いっさいスキルオープンしない、なんて言った時は少し警戒したんだけどさあ…………。ちよつと褒められたぐらいでステータス見せちゃうつてどういうこと？ くくく…………、ほんつと勇氣あるわ君！ それとも何？ 仲間外れは嫌つてか？ ふははははは！」

「…………その割には俺のことが気になってしょうがなかったみたいだが？ わざわざご機嫌取りしてよ」

「単なる取り越し苦労だったよ、慎重すぎるのも考え物だ。まさか本当にあんな低レベルだったなんて。その程度じゃいくらあがこうが『捕食領域』の餌食なわけだが？」

「そんでまんまと俺の猿芝居にかかったわけだ。あんまり気になつてるみたいだったから見せてやつたんだよ」

「…………はあ？ なに言つてんだお前？ 大体さつきからなんでそんなでかい口叩けるわけ？ お前は『身の程知らずのゴミクズの分際で人喰い様に口を利いてすいませんでした』つて命乞いすんのが筋つてもんだろつがよお！！」

「黙れよ、マンイーターに飲まれた雑魚が！」

「……………………くくつ。決めた。普通はバインドのヤツは後回しにすんだけど、まずお前、殺すわ」

セインの体の輪郭が赤い線で囲われる。それは対象からターゲットを受けているサイン。

そしてすぐに視界上部にポップアップする敵の発動スキル。

マナイト レベル66 対人即死攻撃 刺突属性

赤黒い凶刃が、光を反射するでもなくひとりのにぎりりと発光する。

そして突き出される容赦ない一撃。

ズシヤッ！

俺は、何をするでもなくその刃を受け入れた。

第七話（後書き）

セインの正体バレバレだったかなあ。
それとも伏線足らなすぎたか……。

第八話

薄暗い森がさらに黒く染まり、視界が暗転する。

俺のHPバーは、物凄いスピードで減少し一気にゼロになった。体から剣が引き抜かれ、俺はどっ、とその場に倒れ伏した。

痛みはない。だが張りつめていた糸が切れたように全身からふつと力が抜けた。

「ふん、ゴミがいきがりやがって」

そう吐き捨てる声が頭上から降り注ぐ。

だがもはや俺に言葉を発する力はなかった。

「……さあて、ジャミル。どうする？ お前のレベルなら動けるだろうけど、もちろん逃げないよなあ？」

俺のことなど眼中になくなった人喰いは、次なる獲物へ牙を向けた。ザツザツとゆっくり足音が遠ざかっていく。

動けないヒーラーを置いてジャミルが逃げる、という事は考えにくい。それに人喰いはどの道全員殺す気だ。

万一ジャミルが逃げたとしても、ヒーラーを即座に殺しすぐに後を追うつもりだろう。

だがヤツは気づいていない。俺の体がまだ消滅していない事を。

俺が左手の指にはめている指輪。

俺が倒れると同時にその指輪の、やや黒味を帯びた紫色の宝玉がわずかに光を放った。

そして指輪に備わっているオートスキルが発動する。

『死神の気まぐれ(デスマーシー)』 即死攻撃によってHPがゼロになった時、HP1の状態で復活する。効果は一戦闘中に一度きり。

俺は音もなく静かに立ち上がった。

HPバーは赤く点滅を繰り返し、下手すると何かの弾みでゼロになっ
てしまっそうだ。

ゲームの話ならいざ知らず、HPバーの枯渇がそのまま生命の喪失を意味するこの世界において、この状態のまま戦闘を続けることはかなりの精神力を要する。

常にHPの管理には気を使い、戦闘中でも大きく安全マージンを取るの
はほぼ常識。

HPが三割減った程度で回復を優先するプレイヤーもいるくらいだ。

俺はともすると回復アイテムを使いたくなる衝動をこらえつつ、武器を持つ右手に力を込める。

「ジャミル、お前のステータスなら最低でもレベル50ぐらいの回避スキルは必要だなあ。あ！でもさっき確認した時とてもそんなレベルじゃなかったかな？悪い悪い。無理言っ
て。それともあれか？他になんかもんのすごいスキル隠し持ってる？……ねえよなあ、お前のことだからあつたらすでにぺらぺらしゃべってるはずだしなあ」

人喰いはジャミルを貶めるのに夢中で背後から忍び寄る俺に気づいていない。

俺の手にしたロングソードは、刀身に大きく渦巻く黒いオーラを纏っている。

すっかり悦に入る人喰いの背後から、俺は無言で攻撃スキルを放

った。

アヴェンジバイト レベル99 剣 単体斬撃属性

ザシユツ！

俺の振るった剣は、背を捉える直前でこちらを振り向いた人喰いを真っ向から斬り下げた。

「ぐわあっ！」と続けて上がる悲鳴。

背後からの攻撃や不意打ち攻撃は、確実に先手が取れ命中率、攻撃力が増加する奇襲となる。

その対処には「奇襲防御」や「奇襲回避」の防御スキル、もしくは奇襲扱いを取り消す「奇襲感知」などが要求される。

これらは当然通常の防御スキルよりも習得難度は高く、ハイレベルプレイヤーでも有効なレベルまで会得していることは稀だ。

だが不運にも俺の攻撃は奇襲にはなりえず、通常攻撃扱いになった。

人喰いの「奇襲感知レベル6」が発動し成功したためだ。意外なハイレベルに俺は驚きを隠せない。

この様子だと奇襲の確率を上げる「奇襲攻撃」のスキルにも熟練しているはずだ。

おそらくマンイーターの戦闘スタイルに合わせて習得したのだと思われる。

俺の攻撃に対し最終的に適用された人喰いの防御スキルは「斬撃防御レベル12」

こちらのスキルレベルが99といえど、確実にダメージは軽減されてしまった。

「ぐ、うう……、なんだ今のは……？」

前かがみになった人喰いが顔を上げて唸る。

俺の持つ片手剣は復讐の刃、ヴェンジェンスエッジ。特殊な性能を持ったユニーク武器だ。

威力は自分が攻撃する相手から受けたダメージのパーセンテージで決まり、スキルレベルも変動する。

ただしスキルを発動した時のHP残量が反映されるため。HPを回復した場合はその分威力が弱まる。

人喰いによつて99パーセントのダメージを受けた俺は、この剣が持つ最高の強化倍率を引き出している事になる。

だがその威力も一度きり。『アヴェンジバイト』を発動した時点で被ダメージによる強化はリセットされる。

またダメージを負えば再び強化することはできるが、HP1の俺にはすでに役に立つ見込みはない。

HPが全快の時、デフォルトでの攻撃力はゼロ。というか攻撃スキルを発動できないといった方が正しい。

一見強力な武器ではあるが、普段はリスクが高すぎてとても使えたものではない。

「ど、どうしてお前……！」

人喰いは仰天し言葉を詰まらせる。不思議でしようがないといった顔だ。

俺は無表情のまま、その顔に向かって口を開いた。

「……俺に即死攻撃は効かないぜ？ マンイートをいくらかましてもムダだ」

「な、なに……？」

もちろんはつたりだ。もう一度マナイトをくらえば俺は間違いなく消滅する。

だが俺はそんな事情をおくびにも出さない。少しでも言葉に詰まったり、ためらいを見せればたちまち見破られてしまうはずだ。

視界の隅で絶え間なく点滅するHPバーが与えてくるプレッシャーを跳ねのけ、俺はポーカーフェイスを貫いた。

「お、おかしい、レベル99の攻撃スキルだと……？ 何かの間違いだろ……？」

「次の一撃で決まりだ」

これもはつたり。すでにヴェンジェンスエッジの刀身から先ほどのオーラが消えている。今はただのおもちゃ以下。

注意深く観察していればスキル名や剣の変化から何らかの仕組みに気づくことができたかもしれないが、人喰いは明らかに動揺していた。

それに俺が本当に即死耐性を持っているのかもはかりかねている様子だ。

低レベル帯にいる俺がそんなレアスキルを持っているはずがない、と疑う反面その可能性が全くゼロでない事はこいつほどのプレイヤーならうすうす感じているはず。

「大体お前、なぜ動ける！？ そのレベルなら『捕食領域』によって強制バインド状態になるはずだ！」

「さあ？」

俺はしらばつくれるが、今度は本物だ。

左手に装備しているのは、表面に幾何学的な文様を持つ丸型の盾。特攻戦士の盾という名のこのシールドは、一切の防御スキルを持

たない。

ただしHPが10パーセント以下になった時、全てのステータス異常が無効になり一度だけ先制攻撃ができるというオートスキル『ラストフォワード』を備えている。

つまり復活した瞬間からこのスキルが発動し、俺はヤツの『捕食領域』によるバインドを防いでいる。

そうだった理由であったが、もちろん敵にわずかばかりでも自分の情報を与えるつもりはない。

俺のレベルをはつきり確認していた人喰いには脅威となるだろう。

だが動揺しているのは人喰いだけではない。

俺は内心、はったりが見破られないかと気が気でなかった。こちらにとつても今の状況はイレギュラーな事態だ。

一度戦闘を行った相手のHPバーは、しばらくの間残量を視認できなくなる。

人喰いのHPバーは残り二割程度。二割も残っている。

本来アヴェンジバイトの一撃で勝負は決まっていたはずだったが、奇襲は失敗、その上予想以上に人喰いのレベルが上がっており、倒しきれなかったのだ。

対する俺のHPバーはわずか数ミリ。

人喰いの前ではHPバーの多寡は意味のないものだが、即死耐性があると言い張っているのにHPが1まで減っているのはどう考えてもおかしい。俺がヤツならばそう思っただろう。

向こうもすでに俺のHP残量は確認しているはず。

そこに気づかない人喰いは、やはり冷静さを欠いていた。

第九話

「く……この……、死に損ないのくせに……!」
「どうする？ マンイートじゃ俺は殺せないぞ？ 武器を変えるか？」

もし仮に俺が即死耐性を持っていたとしても、マンイーターと他の武器を交換して止めを刺すことはできる。

当然『スイッチ』だってセットしてあるに違いない。

『スイッチ』は瞬時に装備武器を入れ替えるスキル。

基本的に装備の変更には行動ターンを消費するが、『スイッチ』を使った場合は武器を変更し即座に行動できる。

ただしその場で好きな武器を選ぶわけではなく、事前にどの武器にチェンジするか前もって設定しておかなければならない。

その上一度『スイッチ』したら逆戻しに武器を変更する事はできない。

だがマンイーターを外してしまうと、その途端『捕食領域』は解除されヒーラーは自由になる。

ヒーラーが逃げれば、ジャミルだって躊躇なく逃走を選択するだろう。

そうなれば俺たち全員を残らず殺すのは極端に難しくなってしまう。

それぐらいはヤツもわかっているはずだ。

お互い身動きが取れないまま睨みあう。俺のほうも決め手を欠いていた。

無駄な被害者を出さないよう、必要以上にヤツを挑発し矛先をこちらに向け、すぐさま俺にマナイトを発動させるよう仕向ける。その後『死神のきまぐれ』と『アヴェンジバイト』のコンボでヤツを倒す。

もともと俺の書いた筋書きはこうだった。

だが実際は火力不足でヤツを仕留める事ができなかった。これはどうしようもない憶測ミスだ。

今戦いは先の読めないニターン目に突入しようとしている。

しかし実は人喰いが何も考えず俺にマナイトをかませばそれで終わるのだ。

そうしたら残るはジャミルとの一騎打ち。

ジャミルは突然の仲間の死に恐怖で身がすくんでいるのか、怒りに我を忘れ何も判断がつかなくなっているのか、すでに攻撃の機会を逃していた。

レベルやステータスに関係なく平等にスキルを発動することができるが、スキルを選択せず一定時間が経過してしまうと待機とみなされその戦闘フェイズには参加できなくなってしまうのだ。

いくら人喰いが手負いとはいえ、そんな状態のジャミルと戦いになるわけがない。最悪このまま何もせず殺されるかもしれない。

ジャミルが勝利するには、マナイトに先制しかつ一撃で仕留めなければならぬのだ。

戦闘開始後の全員の行動は、人喰いの俺へのマナイト、その後のアヴェンジバイト、ジャミルの待機、ヒーラーは当然行動不能という流れとなり、ひとまずは仕切りなおし。

俺は次の行動で武器を『スイッチ』し真正面から攻防を挑まなければならぬ。

次にセットしてあるのはライトニングレイザーという片手剣。

いくつか改造を施したこの武器が発動する攻撃スキルは『スタンエッジ』。ダメージを与えそのターンの敵の行動をキャンセルするスタン効果を持つ斬撃技。

スタンの発動確率は半々といったところだが、この効果は先制しないという意味がない。

だがマンイートのようなSP消費の大きい大技は発動が遅い。

連続攻撃用にカスタマイズした俺のレイザーなら、運さえよければ反撃を受けずに一方的に攻撃を繰り返すこともできる。

だがこれはかなり危険な賭けになる事は間違いない。

一撃では残り二割にはまず届かない。おそらく二発でギリギリ。

わずかではあるが相手は『捕食領域』によってHP1の俺以外ジャミルとヒーラーのHP を吸収している。

それを考慮に入れると三連撃が決まってどうにか勝利といった具合だろう。

スタン率五十パーセントを二回、スキル自体の命中率を入れると成功率はもっと下がる。相手の防御スキルも得体が知れないし、正直そんな危ない橋は渡りたくない。

セカンドウエポンをもっと突き詰めておくべきだったかもしれない。用意するのはこれが限界だった。

せめてジャミルが動いてくれれば。

そんな他人に頼らざるを得ないほど厳しい状況に追い詰められていた。

だが、俺の目的は人喰いを殺すことではない。それを改めて意識すると、俺はこの場を打開できそうな手段を何とか見出した。

「マ、マンイーターには即死攻撃以外の攻撃スキルだってある！」
「ねえよ」

俺にでまかせは通用しない。俺は全て「知っている」から。全く動じない俺に人喰いはみるみるうちに表情を強張らせ、ついに感情を爆発させた。

「な、なんなんだよ……、なんなんだよお前！ これまでのやつらは奇襲で一人殺せば、たいていはビビるか混乱するかで戦意を喪失する……。なのにお前の余裕はなんだ！？ まるでこうなることがわかっていたかのように……。……そうか、お前気づいていたな……。いつからオレが人喰いだと気づいた……。！？」

「そうだな……。まずはマンイーターのオートスキル『捕食領域』。こいつの正式名称および効果を知っているプレイヤーがはたしているか。俺がサラリと口にしたからお前はすでにスキルの情報が割れていると思っただけをあわせたんだろうが、お前は『捕食領域？』なんのことだいそれは』って言わなきゃダメだったんだよ。最も重要なバインド効果について触れなかったのは、俺がその事を知らないと当たりをつけたからだろ？」

「……。カマをかけやがったのか……。」「術者のレベルより半分以下の人間を強制バインド状態にさせる……。初見でかまされれば慌てるかもしれないが、事前にそれを知っていればバインドを防ぐ手立てなんていくらでもある。あと言うておくが聖戦士に即死攻撃を防ぐスキルなんて存在しない」「な、なぜお前はそれを……」

俺はそれには答えずに、さらに続けた。

「実を言うと俺はさ、はなっから疑ってたよ。……。なあ、人喰いに殺されたパーティの生き残りっていう設定だったみたいだけど、実際会った事あるか？ そんな奴らに」

人喰いは無言でわずかに視線を逸らす。

俺はそれを否定と受け取った。

「襲われた時の話を聞き出すのも一苦勞だったぜ？ わけもわからず仲間を目の前で殺された恐怖と、それを見捨てて逃げ出した罪悪感がフラッシュバックすんだとよ。で、俺みたいな低レベルの怪しい奴にも泣いて頼むんだ。『人喰いを止めてくれ』ってな」

俺はこの日のためにできる限りの情報収集を行った。

その相手が廃人同然だったとしても、引き出せるだけ情報を聞き出した。

「それがソロプレイでひたすら自分を鍛えて人喰いに仇討ちする？ かなり厳しいんじゃないのか？ 一回逃げちまったやつってのはことのほか脆いもんだよ。仮にそんな超人がいたとしたら、今回の戦い、一人で人喰いを打ち倒すぐらいの相当な覚悟で望むはずだろうに、お前は行きずりの味方のスキルだとかレベルをしきりに気にしたりでやってることが支離滅裂なんだよ」

そう、最初から味方なんて当てにしないはずだ。俺のように。

「とにかく粗が目立つ。なあ、お前……何人目だ？」

それまで身じろぎ一つせず俺の話を聞いていた人喰いは、その言葉聞いてビクツと体を反応させる。

「そのマンイーター……、奪ったんだろ？ 前の人喰いを殺って」

第九話（後書き）

主人公がひたすらダメだしを始めました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7497x/>

Skill Force Fantasy

2011年10月29日02時17分発行